

# 平成 26 年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の結果分析

## 第 2 学年

東久留米市立南中学校

### ( 理科 )

#### ◇結果分析Ⅰ

##### <正答数分布から>

正答数の少ない生徒は東京都の平均に比べ非常に少ないが、正答数の少ない生徒から多い生徒にかけて幅広く分布している。

正答数が最も多い生徒の割合は 14 問～18 問、最も少ない割合は 0 問～8 問である。

東京都の傾向とは異なり、全体的に正答数が多くなっているため、正規分布よりも右よりになっている。

東京都と比較して、正答数が 8 問以下の生徒の割合は低く、19 問～23 問、24 問以上の生徒の割合は高くなっている。

##### <到達目標値達成の生徒の割合から>

到達目標値（20 問）に達成している生徒の割合は 26.9% であり、東京都の平均を 7.0 ポイント上回っている。

24 問～28 問（最上位階級）、19 問～23 問（上位層）は東京都を大きく上回っている。

#### ◇結果分析Ⅱ

##### <観点別結果から>

理科への関心・意欲・態度は全都平均正答率より 2.2% 高かった。思考・判断・表現は全都平均正答率より 4.0% 高かった。技能は全都平均正答率より 9.3% 高かった。知識・理解は全都平均正答率より 7.6% 高かった。

実験・観察を多く取り入れた授業展開にしたことが、技能が全都平均正答率より 9.3% も高くなることにつながったのではないかと思われる。

##### <領域別結果から>

取り出す力は全都平均正答率より 3.8% 高かった。読み取る力は全都平均正答率より 4.9% 高かった。解決する力は全都平均正答率より 5.5% 高かった。

問題解決実験や実験後のレポートを実施したことで、解決する力が全都平均正答率より 5.5% 高くなることにつながったのではないかと思われる。

## ◇課題

### <結果分析Ⅰから>

- 正答数が14問～18問（中間層）の生徒に、基礎的・基本的な内容の一層の定着をはかり、到達目標を達成させる必要がある
- 正答数が19問～23問（上位層）の生徒に、思考力・判断力・表現力等の一層の伸張を測り、最上位になるような指導をしていく必要がある。
- 中間層や上位層を中心とした指導を行うことにより、最下位層・下位層の生徒が全くわからなくなってしまいうような指導にならないように注意する必要がある。
- 正答数が0問～8問、9問～13問の生徒が中間層になれるように、丁寧な指導を心がける必要がある。

### <結果分析Ⅱから>

- レポート実験を継続する。
- 思考・判断・表現を向上させる指導の充実を図る。
- 実験データを活用し、そこから、読み取ることのできる事柄や必要なデータの抽出を行えるような指導の充実を図る。